

淫乱夫婦と淫乱カップルのパーティー、 童貞も処女もニューハーフもみんなで乱 交NTR

第一部

序章

十月の終わりの日曜日。曇り空の下、杏樹はキッチンに立っていた。

カップに注がれた紅茶は、まだ湯気を立てていた。アールグレイの香りが、リビング全体に広がっている。窓の外は灰色の空で、部屋の中は暖房の温もりと、紅茶の香りが満ちていた。杏樹は白いエプロンを身に着け、丁寧にティーカップを並べている。

「ねえ、杏樹」

蒼真の声がリビングから聞こえてくる。杏樹は手を拭きながら振り返る。蒼真はソファに座り、タブレットを手にしていた。三十路間近の顔立ちは穏やかだが、目だけはいつものように何かを企んでいる光を含んでいた。

「来週、またみんな呼ぶんだけど」

杏樹はティーカップをトレイに乗せながら、蒼真の隣に座る。ソファは本革で、座ると沈み込むような感触がする。

「……また雄斗くんたち？」

「ああ。でも今回は趣向を変えて」

蒼真はタブレットの画面を杏樹に見せる。画面には、若い男の写真がふたり写っている。ひとりはおどおどした目をした大学生風の青年。もうひとは長髪で無愛想な顔をした若い男性だ。

「童貞君をふたり、連れてくる」

杏樹は眉を少し上げた。蒼真は続ける。

「それと……処女の女の子。十九歳」

杏樹はカップを手に取り、蒼真の隣により近く座る。蒼真の膝に、そっと手を置く。

「どうということ？」

「その子、文学部の後輩なんだ。詩織っていうんだけど……とにかく、変わった子でさ」

蒼真はタブレットを操作して、別の写真を見せる。画面には、黒髪の静かな目をした少女が写っている。制服姿で、図書室のような場所で本を読んでいる。白い肌に、透明感のある顔立ち。長い睫毛が、静かな瞳を覆っている。

「童貞のふたりは、金銭的な理由で参加する。蓮っていう大学生は、コンプレックスから解放されたくて。圭っていうフリーターは、正直、お小遣い稼ぎ。でも、この子は違う」

「違う？」

「自分から参加したい、って言ってきた。理由は『興味があるから』だけど……」

蒼真は杏樹の顔を覗き込む。杏樹は写真の少女を見つめる。静かな目。でも、瞳の奥に、何か熱のようなものを感じる。単なる好奇心ではない、もっと深い渴望。

「杏樹になら、自分を預けられるって。どこかで、お前の噂を聞いたみたいだね」

杏樹は写真を見続ける。詩織。十九歳。文学部。

「私が……その子の、初めてを？」

「嫌かい？」

蒼真の手が、杏樹の腰を撫でる。杏樹は、自分の胸の高鳴りに気づく。女の子の初めて。それも、自分に委ねてくれるなんて。

「……嫌じゃない」

杏樹は、蒼真の耳元に唇を近づける。蒼真の匂いが、甘く感じられる。

「でも、私……緊張するかも」

蒼真は笑う。

「お前が緊張する？いつもはみんなをあんなに淫らに乱れさせてるくせに？」

「だって、女の子は初めてだもの。どうすればいいか、わからない」

「杏樹なら大丈夫。お前の優しさで、ちゃんと淫らに乱れさせてあげればいい」

蒼真の手が、杏樹の胸に触れる。ブラウスの上から、乳首の上を、指で円を描くように撫でる。

「それに……杏樹が女の子とエッチしているところ、見たいんだ」

杏樹は、息を漏らす。

「私が……いじめちゃうかもよ？」

「いいよ。杏樹の変態なところ、全部見せて」

蒼真は杏樹の耳たぶを噛む。杏樹は、甘い疼きを感じながら、写真の少女をもう一度見る。

詩織。

名前だけでも、なぜか胸が躍る。

「わかった。受け入れるわ。その子を、私色に染めてあげる」

蒼真は満足そうに頷く。

「頼んだよ。……それじゃ、来週の土曜日。みんなで、その子を可愛がってあげよう」

杏樹は、蒼真の言葉に、自分の下腹部の下が熱くなるのを感じた。

一週間後。土曜日の午後。

杏樹は朝から準備に追われていた。リビングの掃除、ベッドシーツの交換、タオルの準備。そして、何よりも気合を入れて選んだ自分の下着と服。

鏡の前で、杏樹は自分の姿を確認する。白いブラウスに、薄いピンクのカーディガン。スカートは膝丈で、足元はストッキングとパンプス。清楚でありながら、何となく艶やかな雰囲気を出している。

「……どうかしら」

自分に問いかけるように呟く。

蒼真が後ろから抱きつく。

「綺麗だよ。今日の杏樹、特に綺麗だ」

「……本当？」

「ああ。きっと、あの子も虜になるよ」

ドアベルが鳴る。

杏樹は深呼吸をして、ドアに向かう。

ドアを開けると、雄斗がニヤリと笑っている。後ろには莉緒が立っている。雄斗は黒いジャケットにジーンズ。莉緒は赤いニットに黒いスカートだ。

「よっ、今日は特別ゲストがいるんだって？」

「ええ。入って」

雄斗の後ろから、莉緒、湊、美緒、颯太、雫が続く。いつもの顔ぶれだ。

湊はベージュのカーディガン。美緒は白いワンピース。颯太は派手な柄のシャツ。雫はピンクのセーターだ。

「お久しぶり～」

雫が手を振る。

「颯太、ちゃんと挨拶してよ～」

「あ、ああ……よろしく」

そして、最後に。

「あ、あの……初めまして」

震える声。小柄な男の子が、雄斗の背後に隠れるように立っている。細い体つきで、おどおどした目をしている。大学生らしい青いチェックシャツに、黒いスラックス。靴は白いスニーカーだ。

「蓮くんだよ？入って、入って」

杏樹は笑顔で招く。蓮は、顔を真っ赤にしながら、玄関に上がる。靴を脱ぐ手が震えている。白い靴下が、ナーバスに動く。

「もうひとりは？」

「圭は後から来るって。あいつさあ、金貰えるって聞いて、やっと部屋から出てきたんだよ。引きこもりのニートみたいなやつなのよ」

莉緒が呆れたように言う。

「それで、もうひとり？女の子」

美緒が興味深そうに言う。

その時、再びドアベル。

杏樹が開けると、そこに立っていたのは――。

黒髪の、文学少女。

詩織は、紺色のコートを着て、小さな黒いカバンを持っていた。制服姿のまま、静かに微笑んでいた。白い襟が、透明感のある肌に映える。

「初めまして。詩織です」

杏樹は、一瞬、言葉を失う。

写真で見た通りの、清純な顔立ち。でも、目だけは、何かを求めている。知識ではなく、経験を。理論ではなく、実感を。

「……ようこそ。杏樹よ」

杏樹は、自分の声が少し震えていることに気づく。

詩織は、おじぎをして、部屋に入る。

その瞬間、部屋の空気が変わった。

いつもの飲み会とは違う。何か、特別なものが始まる予感。清純な空気が、入ってきた瞬間に、部屋全体を変えた。

蒼真がキッチンの扉から顔を出す。

「お、全員揃った？じゃあ、始めようか」

詩織は、蒼真を見て、そして杏樹を見る。視線は、杏樹に長く留まる。

杏樹は、その視線に、自分の胸が高鳴るのを感じた。

第一章

リビングには、普段より多い人数が集まっていた。

いつものソファには、雄斗と莉緒、湊と美緒、颯太と雫が座っている。雄斗は莉緒の肩を抱き、湊は美緒の手を握っている。颯太は雫にからかわれながら、照れている。

そして、床に座布団が敷かれ、そこに蓮と、後から来た圭が座っている。

圭は無愛想な顔で、腕を組んでいる。長めの髪で、顔の半分を隠している。黒いパーカーに、汚れたジーンズ。引きこもり特有の、人を見る目ではない。

「……本当に金、もらえるんだよな」

圭は杏樹を見ずに言う。

「もらえるもらえる。蒼真さんは約束守るから」

雄斗が笑う。

詩織は、部屋の隅の椅子に座っている。背筋を伸ばして、周りを見渡している。好奇心に満ちた目で、部屋の中の人々を観察している。まるで、新しい物語の登場人物を観察するように。

杏樹は、紅茶とお菓子を運びながら、詩織の様子を窺う。

(緊張してるのかしら.....)

でも、詩織の目は、部屋の中を好奇心いっぱいに見ている。

「じゃあ、まず自己紹介から？」

蒼真が提案する。

「俺と杏樹は、もう知ってるよね。雄斗くんたちも、前から来てるメンバーだ」

雄斗が手を挙げる。

「雄斗と莉緒。同棲して三年目。.....ま、色々やってるカップルってことで」

莉緒が隣で笑う。

「雄斗は元ヤンで、今は普通のサラリーマン。莉緒は普通のOL。趣味は、まあ.....こういうの？」

「こういうの、ね」

美緒がクスツと笑う。

「湊と美緒です。同棲二年目。私、見た通りおとなしいんですけど.....実は、湊をいじめるのが趣味で」

湊が照れながら頷く。

「はい。美緒の言うこと、何でも聞きます」

「颯太と雫！大学生カップル！私、颯太をいじめるの好きなんだ～」

雫が明るく手を挙げる。

「お、おい.....」

颯太が慌てる。

「颯太はチャライ風してるけど、実は私の言うこと何でも聞くんだよね～」

「べ、別に.....」

颯太が目を逸らす。

杏樹は、詩織に近づく。

「私は杏樹。蒼真の妻。……今日は、あなたを歓迎したいの」

詩織は、杏樹を見上げる。

「……ありがとうございます。私は詩織。十九歳です。大学の文学部」

「文学部……素敵ね」

「はい。……でも、今日は、本を読みに来たわけじゃないです」

詩織は、静かに言う。

「私、初めてなんです。でも、自分からここに来ました。……杏樹さんに、奪ってほしくて」

部屋が、一瞬静まる。

蓮が、顔を真っ赤にして俯く。圭も、ちらりと詩織を見る。

「……へえ」

莉緒が興味深そうに身を乗り出す。

「自分からか。いいじゃん、覚悟決まってるね」

「はい。覚悟は、できてます」

詩織は、杏樹の目をまっすぐ見つめる。

「だから手加減なんてしないでください。私、淫乱に扱われたいんですっ！」

杏樹は、胸の奥が熱くなるのを感じる。

この子、本物だ。

「……わかった」

杏樹は、詩織の頬に触れる。

「じゃあ、淫乱にしてあげる。私の手で」

詩織は、初めて、はっきりとした笑顔を見せた。

自己紹介が終わり、少しアルコールも入りいつものようにゲームが始まった。

「じゃあ、王様ゲームでいい？」

雫が提案する。

「いいよ。盛り上がるし」

雄斗が賛成。

クジを引き、王様を決める。

最初の王様は、美緒。

「えーと、3番と5番が、キス」

3番は莉緒。5番は——蓮。

「は、はぁ！？」

蓮が慌てる。

「あら、私とこの子？」

莉緒が笑う。

「ほら、来なよ。童貞くん」

莉緒が手招きする。蓮は、震えながら立ち上がる。

「あ、あの……」

「緊張なくていいよ。ちょっと口つけるだけだから」

莉緒は、蓮の肩を掴んで、唇を近づける。

蓮は、目をつぶって、震えている。

莉緒の唇が、蓮の唇に触れる。柔らかい音がして、離れる。

「……どう？初キス？」

「あ、あ……」

蓮は、言葉を失っている。

「可愛い～」

雫が笑う。

次の王様は、雄斗。

「1番と4番が、服を一枚脱ぐ」

1番は蒼真。4番は圭。

「お、俺か」

蒼真は笑いながら、上着を脱ぐ。

「……はあ？」

圭は渋い顔をするが、仕方なく、パーカーのジッパーを下ろす。

「もっと脱げよ。一枚って言ってるだろ」

雄斗が突っ込む。

「……チッ」

圭は、パーカーを脱ぎ捨てる。白い、引きこもり特有の色の薄い肌が露わになる。鎖骨が浮き出ていて、細い体つきだ。

「結構いい体じゃん」

莉緒が評価する。

圭は、腕を組んで、不愛想な顔のまま、座り直す。

ゲームは続く。王様が変わり、命令はエスカレートしていく。

「3番と7番が、耳元でエッチなこと囁く」

3番は湊。7番は圭。

「……え、俺？」

圭が顔をしかめる。

湊は、圭の耳元に近づく。圭の耳は、小さくて、白い。

「……美緒に、いじめられるの、好きなんです」

湊が、小さく囁く。

圭は、目を丸くする。

「……は？」

「美緒の言うこと、何でも聞きます。……それが、嬉しくて」

湊は、照れながら、圭の耳元でそう言った。

圭は、何も言えずに、顔を赤くしている。

ゲームは二時間続いた。酒もたくさん呑み、みんなの頬は赤くなっている。空き缶やグラスがテーブルに並び、部屋の空気は甘やかになってきた。

「じゃあ、そろそろ……本題？」

蒼真が言う。

「そうだね。今日は、特別なゲストがいるわけだし」

雄斗が、蓮と圭、そして詩織を見る。

「お前ら、わかってるよな？今日は、お小遣い稼ぎじゃないんだぞ」

「……はい」

蓮が、小さく頷く。

「俺は……童貞です。だから、俺の筆おろしをお願いします！」

蓮が、頭を下げる。

圭は、腕を組んだまま。

「……金、もらえるんだったら、別に何でもする」

「わかってるって。雄斗が保証するから」

雄斗が笑う。

詩織は、静かに立ち上がる。

「私は……お金はいりません」

「……へ？」

圭が驚く。

「私は、自分から来ました。だから……お礼とか、必要ないです」

詩織は、杏樹を見る。

「私が欲しいのは……経験です。杏樹さんに、教えてもらいたいです」

杏樹は、立ち上がる。

「……わかった。じゃあ、始めましょう」

杏樹は、蒼真を見る。

蒼真は、ソファに座ったまま、頷く。

「杏樹が仕切っていいよ。俺は、見てるから」

杏樹は、深く息を吸う。

「じゃあ……まずは、実験から始めましょう。童貞くんふたりと、詩織。ふたりの男の子で、詩織を可愛がってみて」

「え……」

蓮が震える。

「俺たちが……この子を？」

圭も、目を丸くする。

「そう。でもおちんちんの挿入はまだダメ。まずは、触るだけね。ペッティング。いわば、予行練習ね」

杏樹は、笑いながら言う。

「詩織も、いい？」

「はい。私、大丈夫です」

詩織は、ベッドルームに向かう。

蓮と圭は、顔を見合わせながら、後に続く。

ベッドルームには、大きなベッドがある。白いシーツが敷かれ、枕がふたつ置かれている。窓からは、夕暮れの光が差し込んでいる。

詩織は、ベッドの上に座り、自分の制服のスカートを整える。白いブラウスに、紺色のスカート。黒いソックスが、白い肌に映える。

「……ふたりで、私を触ってください」

詩織は、静かに言う。

蓮は、震えながら詩織の隣に座る。圭は、渋い顔で反対側に座る。

「ど、どうすれば……」

蓮が、おどおどと言う。

「まずは、服の上からでいいわ。触ってみて」

杏樹が、ドアのところから見守りながら言う。蒼真も、杏樹の隣に立って見ている。

蓮は、震える手で、詩織の肩に触れる。指先が、ブラウスの生地越しに、詩織の肩の骨を感じる。

「……冷たい？」

「い、いえ。温かいです」

蓮は、詩織の肩から、腕へと手を這わせる。細い腕。白い肌。肘の曲線。

圭は、腕を組んだまま、じっと見ている。

「圭くんも。ふたりで触るの」と杏樹は言った。

圭は、渋い顔のまま、詩織の膝に手を置く。スカートの上から、膝の小さな骨を感じる。

「……こうかよ」

「はい。……もっと、上に」

詩織が言う。

圭は、詩織の膝から、太ももへと手を這わせる。スカートの下に手を入れ、生の肌に触れる。

「……柔らかいな」

圭が、思わず声を漏らす。

蓮も、詩織の腕から、脇腹へと手を移動させる。ブラウスの下に手を入れ、温かい肌に触れる。

「……す、すみません」

「謝らないで。もっと触ってください」

詩織は、自分のブラウスのボタンを外し始める。白い指が、一つ、また一つとボタンを外していく。

「え……」

蓮が、目を丸くする。

「服の上からじゃ、わからないでしょう？直接、触ってください」

詩織は、ブラウスを脱ぎ、スカートも脱ぐ。ブラとパンツだけの姿になる。白いブラは、小さな胸を優しく包んでいる。

「わ、私……」

詩織は、顔を真っ赤にする。

「早くしろよ。恥ずかしがってる場合じゃないだろ」

圭が、渋い顔で言う。

圭は、詩織のブラに手をかける。後ろ手でホックを外す。カチッという音がして、ブラが外れる。

ブラが外れ、詩織の小さくて白い胸が露わになる。乳首はピンク色で、既に少し硬くなっている。

「……綺麗なおっぱいだなあ」

圭が、思わず声を漏らす。

「触って」

詩織が言う。

圭は、渋い顔のまま、詩織の胸に手を置く。掌に、小さな柔らかさが収まる。

「……柔らかい」

蓮も、おずおずと、もう片方の胸に手を触れる。ふたりの手が、詩織の胸を、左右から触る。

「あ……」

詩織が、小さく声を漏らす。

「気持ちいい？」

杏樹が、ドアから聞く。

「はい……。ふたりの手、違います」

「どう違う？」

「圭さんの手は、冷たくて……少し荒い。蓮さんの手は、温かくて、柔らかい……」

詩織は、ふたりの手の違いを、言葉にする。

圭は、詩織の乳首を指で転がす。硬くなった突起を、指の腹でくるくると回す。

「あっ……！」

詩織が、背中を反らす。

「ここ、硬くなってる」

「はい……。触られて、そうになりました」

詩織は、恥ずかしそうに言う。

蓮は、詩織の乳首を、優しくつまむ。指で挟んで、軽く引っ張る。

「あっ……！」

詩織が、背中を反らす。

「こ、こう？」

「はい……。もっと、強くてもいいです……」

ふたりは、詩織の胸を、もっと強く揉み始める。圭は力強く、蓮は優しく。ふたりのリズムが違い、詩織は混乱しながら感じる。

「あっ、あっ……！」

詩織は、ふたりの手の中で、喘ぐ。

「次は、下も触ってほしいです……」

詩織が言う。

圭は、渋い顔のまま、詩織のパンツに手をかける。白いパンツの上から、恥骨の形を感じる。

「……いいのか？」

「はい。触ってください」

圭は、詩織のパンツを下ろす。足を持ち上げて、パンツを脱がせる。

露わになったのは、無毛の、清潔なオマンコ。ピンク色の小さな割れ目が、ぴったりと閉じている。

「……すごい」

蓮が、思わず声を漏らす。

「さわって……」

詩織が言う。

圭は、渋い顔のまま、詩織のおまんこに指を這わせる。割れ目の上を、そっと撫でる。

「……濡れてる」

「はい……。胸を触られて、そうになりました」

蓮も、詩織のおまんこに触れる。ふたりの指が、詩織の割れ目を撫でる。

「あっ、あっ……！」

詩織は、ふたりの手の中で、腰を動かす。

「気持ちいい？」

圭が、渋い顔で聞く。

「はい……。すごく、気持ちいい……」

「……へえ」

圭は、詩織のクリトリスを指で転がす。小さな突起を、指で探り当てる。

「あっ……！そこ、敏感です……！」

「ここか？」

圭は、クリトリスを強く押す。

「あっ、あっ……！だ、だめ……！」

詩織は、ふたりの手の中で、絶頂に達しそうになる。

「もっと、中も触って……」

詩織が言う。

圭は、渋い顔のまま、指を詩織の中に入れようとする。割れ目の下の方を探り、小さな穴を見つける。

「……ちょっと待てよ」

蓮が、圭を止める。

「……どうした？」

「その、俺……」

蓮は、自分のズボンの上から、膨らみを示す。そこには、大きなテントができています。

「……俺、もう我慢できないかも……」

蓮は、顔を真っ赤にして言う。

「……仕方ないな」

圭も、自分のズボンを見る。そこには、大きな膨らみができています。パンツの上からでも、形がわかる。

「じゃあ、次は、その、挿れて、ください……」

詩織が、潤んだ目で聞く。

「……いいのか？」

圭が、確認する。

「はい。ふたりのどちらかで……私の初めて、奪ってください」

詩織は、ベッドに横たわる。白い肌が、夕暮れの光に照らされて、金色に輝く。

「……じゃあ、俺がする」

圭が、自分のズボンを下ろす。パンツも一緒に下ろす。

露わになったのは、大きくそそり立つ男の性器。血管が浮き出て、先端から透明な液体が垂れている。

「……大きい」

詩織が、思わず声を漏らす。

圭は、詩織の足を開き、自分の性器をあてがう。先端が、詩織の小さな穴に触れる。

「んっ……！」

詩織が、眉をしかめる。

圭の先端が、詩織の入口に触れる。でも、なかなか入らない。詩織の穴は、きつく閉じている。

「……入んねえな」

圭が、焦りを見せる。

「も、もうちょっと……」

圭は、もう一度、腰を進めようとする。両手で詩織の腰を掴み、力を込める。

「あっ……！」

詩織が、小さく叫ぶ。

圭のペニスは、詩織の入口で、つるんと滑ってしまう。詩織の割れ目の上を滑り、クリトリスを擦ってしまう。

「……チツ」

圭は、自分のものを握り、もう一度あてがう。

でも、今度は——。

「……あ？」

圭のペニスは、大きくなっていたはずが、急に小さくなっていた。血管が引っ込み、先端が垂れ下がる。

「……萎えた」

圭が、呆れたように言う。

「え……」

詩織が、目を丸くする。

「……緊張したのかよ」

圭は、自分の萎えたペニスを見て、渋い顔をする。先端は、完全に小さくなり、皮膚に覆われている。

「……俺、こういうの、初めてだから……」

圭は、顔を赤くして、ベッドから降りる。パンツを履き直す。

「……悪いな。続き、できねえ」

圭は、ズボンを履き直す。萎えたものを隠す。

蓮も、慌てて自分のものを隠す。蓮のものも、萎えかけていた。

「おっ、俺も……緊張して……」

蓮は、顔を真っ赤にして、ベッドから降りる。

詩織は、ベッドの上で、呆然としている。足を開いたまま、露わなオマンコを見せつけている。

「……ダメ、だったんですか？」

杏樹は、ドアから入ってくる。

「いいのよ。初めては、そういうこともあるわ」

杏樹は、詩織の隣に座る。白いシーツの上に、詩織の裸身が横たわっている。

「ふたりには、まだ早かったみたいね」

詩織は、杏樹を見る。

「……じゃあ、私の初めては？」

「私がもらうわ」

杏樹は、詩織の頬に触れる。冷たい汗を拭う。

「女の子同士で、初めてを奪うの。それも、素敵なことじゃない？」

詩織は、潤んだ目で、杏樹を見つめる。

「……はい。杏樹さんになら、私……」

杏樹は、ふたりの童貞を見る。

「ふたりは、外で待ってて。ここからは、女同士の時間よ」

圭と蓮は顔を見合わせ、圭は渋い顔で、蓮は申し訳なさそうな顔で部屋を出た。

ドアが閉まる。

杏樹は、詩織を抱きしめる。

「じゃあ、始めましょう。私とあなたの、初めてを」

詩織は、杏樹の胸に顔を埋める。

「はい……。お願いします、杏樹さん」

つづく